

長崎県型高設栽培における培養苗の未分化苗を用いたイチゴ栽培技術

藤田晃久・梁瀬十三夫
(長崎県総合農林試験場)Teruhisa Fujita and Tomio Yanase :
Tissue Culture Plantlet of Non-generate Flower Bud Using for Strawberry in 'Nagasaki type'
of High-rise Isolated Bed Culture

イチゴの栽培において育苗は長期間の管理を必要とするため、農家の負担となっている。

長崎型高設栽培において育苗期間の短縮および軽作業化のため、未分化苗の定植技術が開発され現地へ普及している。そこで、更なる育苗期間の短縮および軽作業化のため、培養苗の未分化苗定植技術への適応性を検討した。

1. 材料および方法

供試品種は‘とよのか’を用いた。培養苗とコントロールとして5月下旬に採苗し72穴セルトレイで約1か月間育苗した苗を2000年7月3日に長崎型高設栽培システムに定植し、株元にジャンプを2錠施用した。その後の管理は未分化苗定植技術に準じた。

2. 結果および考察

定植時および定植1か月後の生育は72穴セルトレイで

育苗した苗よりも葉長・葉柄長ともに小さかったが、10月にはほぼ同等となった（第1表）。収量は培養苗が72穴セルトレイよりもやや少なかったが、有意差はなかった（第2表）。培養苗は現在の普通ポット栽培における育苗にかかる期間と手間が大幅に省略でき、72穴セルトレイによる未分化苗定植よりもさらに育苗期間の短縮・苗の持ち運び等において省力となる。また、本圃への定植時期を6月下旬から7月10日までに行い、早めに栽培を開始することで、十分な生育と収量が得られるため、培養苗の未分化苗定植技術への利用が可能であると考えられる。72穴セルトレイと同じ肥培管理で培養苗は多芽株発生がみられる。そこで、更なる増収および生産の安定のため施肥設計・栽培管理の見直し等が必要であると思われる。

第1表 定植時および定植後の生育

処理区	定植時(7/4)		定植後(8/4)		定植後(10/2)	
	葉長 (cm)	葉柄長 (cm)	葉長 (cm)	葉柄長 (cm)	葉長 (cm)	葉柄長 (cm)
培養苗	6.3**	1.8*	14.5**	6.7**	18.0	8.6
コントロール	12.9	3.9	21.9	9.4	17.9	8.7

注) a) 定植前は5株平均その後は30株平均の値。

b) ** : 対象のコントロール区に対し1%水準で有意

* : 対象のコントロール区に対し5%水準で有意。

第2表 月別収量 (g/10株)

処理区	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	合計
培養苗	563.5	821.2	627.2	1145.1	1205.4	425.1	42.4	4829.8
コントロール	661.7	681.4	739.9	1092.5	1374.9	802.0	47.7	5400.1